

從島木健作的《滿洲紀行》看滿洲農業移民

林雪星

東吳大學日本語文學系副教授

摘要

島木健作是從昭和十四年的春天至夏天約兩個月去滿洲旅行，主要參觀了北滿開拓地及視察了北海道、朝鮮、中國、九州、日本東北等各地的農村。昭和十五年島木健作將所見所聞的隨筆集成『滿洲紀行』由創元社刊行。

《滿洲紀行》的序裡島木健作提及，滿洲旅行的動機及目的是，想透過在北滿的日本農民的生活，觸及開拓地《滿洲國》的新國家的動向，並探究目前為止的旅行者所寫的文章裡，對在北滿的日本開拓農民的生活傳遞了多少的事實？總而言之，島木健作所關心的是日本移民或滿洲人在滿洲這個地方過著什麼樣的生活？又如何地生活這一點上。

本論將探討島木健作的《滿洲紀行》裡如何描述北滿開拓農民的實際情形，藉此將島木健作作品裡的滿洲農業移民像浮現出來。

關鍵字：

滿洲農業移民 五族協和 勞力不足 北海道農耕法 滿洲式農耕法

島木健作の『満洲紀行』からみる満洲農業移民

林雪星

東呉大学日本語学科副教授

要旨

島木健作は昭和十四年（1939年）春から夏にかけて、約二ヶ月満洲旅行にでかけ、おもに北満開拓地を見学し、北海道、朝鮮、中国、九州、東北など各地の農村を視察した。昭和十五年（1940年）、『満洲紀行』は、優れたルポルタージュとして創元社により刊行された。

『満洲紀行』の序で島木は、満洲旅行のきっかけや目的について「北満における日本農民の開拓地を通して、新しい國の動きに觸れようとしたのである」（p 1）、「現實はどれほどの部分も伝えられてはゐないだらう」（p 2）と語っている。言い換えれば、島木が関心を持つのは「人々がそこでどんな暮らしをし、いかに生活しているのか、日本人移民であれ、満州人であれ」その一点に向けられるのである。

本論では島木健作の『満洲紀行』における北満開拓農民の実態はいかに描かれているか、それを通して島木健作の作品に描かれる満洲農業移民像を浮き彫りにする。

キーワード：

満洲農業移民 五族協和 労力不足 北海道農法 満人式農法

Agricultural Immigration of Manchu in My Journey to Manchu by Shimaki-kennsaku

Xue-Xing Lin, Associate Professor
Japanese Department, Soochow University

Abstract

Shimaki-kennsaku went to Manchu in the 14th year of the reign of Emperor Shōwa and stayed there for two months in late spring and summer. He visited mainly the frontier of Northern Manchu and many agricultural villages in Hokkaido, Joseon, China, Kyushu, and the Northeastern part of Japan. His essay collection of *My Journey to Manchu*, mainly about what he saw during the trip, was published by Sogensha in the 14th year of the reign of Emperor Shōwa.

In *My Journey to Manchu*, the author specifies the motivation and the purposes of his trip to Manchu, saying he wants to learn about the prospects of Manchukuo as a new country through exploring the lives of Japanese farmers in Northern Manchu and the frontier. He also intends to find out how much truth about the lives of those pioneering Japanese farmers in Northern Manchu had been revealed in the writings of the travelers. In general, Shimaki-kennsaku is concerned about the kind of lives the Japanese immigrants and native Manchurians have in Manchu and how they can make a living there.

This paper will examine the way of life of those pioneering farmers in Northern Manchukuo as it is portrayed in *My Journey to Manchu*, and how the descriptions in the work reflect the reality of agricultural immigrants of Manchu.

Key words: Manchurian agricultural immigrants, harmony among five ethnic groups, insufficient labor, Hokkaido farming, Manchurian farming

島木健作の『満洲紀行』からみる満洲農業移民

林雪星

東呉大学日本語学科副教授

1. はじめに

島木健作は昭和 14（1939）年春から夏にかけて、約 3 カ月、満洲旅行にでかけ、おもに北満開拓地を見学し、北海道、朝鮮、中国、九州、東北など各地の農村を視察した。昭和 15（1940）年、『満洲紀行』は、優れたルポルタージュとして創元社により刊行された。なお、この『満洲紀行』は「青服の人」と題する一つの創作作品を除き、「北満開拓」、「新たなる出発」、「満洲旅日記抄」、「勃利にて」、「興農鎮の一夜」、「孫呉にて」、「車中瞥見」、「齊々哈爾から訥河まで」、「満洲の日本人の生活」、「満洲の農家」、「満洲へ旅する人に」、「ある読書」、「感想」、「旅の手帖から」の 14 篇の紀行文から構成されている。また、『満洲紀行』の序で島木健作は、満洲旅行のきっかけや目的について「北満における日本農民の開拓地を通して、新しい國の動きに觸れようとしたのである」（p. 1）、「現實はどれほどの部分も傳へられてはゐないだらう」（p. 2）、と語っている。言い換えれば、島木健作が関心を持つのは「人々がそこでどんな暮らしをし、いかに生活しているのか、日本人移民であれ、満州人であれ¹」その一点にのみ向けられるのである。こうした点を踏まえ、本論では、島木の『満洲紀行』における北満開拓農民の実態がいかに示されているのかやまた、それを通して島木健作の作品に描かれる満洲農業移民像を浮き彫りにしたいと思う。では、まず、島木健作の生涯と満洲との関係について述べる。

2. 島木健作の生涯

島木健作は 1903 年に北海道の札幌に生まれ、本名は朝倉菊雄で

¹ 川村湊『異郷の昭和文学—「満州」と近代日本—』（1998. 7. 17、初出 1990. 10. 19）岩波書店 p. 57

ある。三歳の時、父親に死なれて母の女手一つで育てられた島木健作は、経済的な理由で高等小学校一年で退学する。その後、北海道大学図書館での勤務を経て、1925 年東北大学法学部の選科に入り、労働者や農民との交流を頻繁に行う。翌年大学を中退し、日本農民組合香川県連合会木田郡支部の有給書記として農民運動に参加する。1927 年共産党に入党する。1928 年の三・一五事件で逮捕され、1929 年に転向の声明を行った。1934 年に転向問題を扱った処女作『癪(らい)』を「文学評論」4 月号に発表し世評を呼ぶ。さらに『盲目』を『中央公論』に発表、短編集『獄』を出版して作家としての地位を確立した。1936 年『文学界』同人になり、『癪』『盲目』に続いて転向問題に切り込んだ長編『再建』は発売禁止となったが、同じ 1937 年に発表した長編『生活の探求』は、知識階級の良心を守るものとして青年層を中心に多くの読者に迎えられベストセラーとなった。1939 年満洲を旅行し、優れたルポルタージュである『満洲紀行』を出版した。しかし、紀行と言っても満洲の風光や名所についての言及があるわけではない。そのかわりに、実際、そこに移住した日本の農業移民や原住民の満洲農民がいかにかに生きているか、これが島木健作の注目した点である。

2.1 島木健作と大陸派遣の経緯

北海道出身の島木健作は、一時は農村生活を送ったが、開拓は彼にとって魅力的なテーマであった。『満洲紀行』にある「北満開拓地の課題」には、「昨年（昭和十三年の夏）東北地方の農村を旅したとき、私は、その地方の人々が、満洲開拓民の問題について強い関心を示しつつあるのを見た。農民たちは、おどろくべき熱心さ、真剣さで開拓地を問題にしてゐた。（中略）しかし、私は答へられなかった」（pp. 3-4）という。ここから見れば、島木健作は満洲へ行く前に、日本東北地方や、北海道の農村を見て回ったことがある。それをきっかけにして、島木健作は満洲へ行く前に、既に満洲に関心を持つようになったと思われることが、次の作品からうかがわれる。まず、

「三十年代一面²」にある主人公野村は、当時学生の卒業論文を読んで「満蒙移民問題、満洲国の成立」(p. 228)について、愛国的思慕の情の溢れているものが大多数を占めることを嘆いている。また「日本への愛³」に石田大助という転向者は満洲に興味を持ち、「せめて朝鮮、満洲、支那は見たかった。(中略)しかし満鮮をみることに東北地方の凶作地をみる異常の自由が許されるであらうか？」(p. 395)と、満洲のことに触れる。そして、「内原見學⁴」では「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所」で渡満壮行会に参加し、「少年達との座談會は、私達に大きな感動を與へた」(p. 68)と語り手の「私」は青少年義勇軍達のことを非常に褒めている。

なお、当時においては、林房雄や杉山平助、小林秀雄らの作家は中国へ行ったことがある。そして、島木健作は「この夏のこと⁵」において、「ともかく作家達は大勢支那へ行き、私も行きたいが、その前に私は田舎へ行って久しぶりに百姓と膝を交へていろいろ物語りがしたい」(p. 125)と自分が中国へ行きたいという意思を示した。そうした中、昭和 13 (1938) 年 10 月に島木健作は、近衛内閣の農相だった有馬頼寧と農民文学の作家たちの第一次懇談会に出席し、そこで、農業問題から農民生活、農民文化、文学に及び広い範囲にわたって懇談、その席上で農民文学懇話会の結成、農民作家の大陸視察、銃後派遣、農民文学賞の設置などについて話し合いがおこなわれた⁶。その後、同年の 11 月 7 日、農民文学懇話会の発会式は丸

² 島木健作「三十年代一面」『島木健作全集 第三卷』(1978. 5、初出 1936. 11. 1『日本評論』第十一卷第十一号に発表、同年同月に竹村書房から刊行された『三十年代』に収録された。)

³ 島木健作「日本への愛」『島木健作全集 第三卷』(1978. 5；初出 1937. 5. 1) 発行の『新潮』第三十四年第五号に発表。

⁴ 島木健作「内原見學」『島木健作全集 第十三卷』(1980. 3；初出『東京朝日新聞』1939. 3. 4 には発表。『随筆と小品』に収録)

⁵ 島木健作「この夏のこと」『島木健作全集 第十三卷』(1980. 3；初出『新風土』1938. 8 月号に発表)

⁶ 尾崎秀樹「満洲国における文学の種々相」『近代文学の傷痕』岩波書店(1991. 6；p. 272)

の内の中央亭で行われ、その会場で有馬農相は「農民関係者以外の者に農民と農村を理解してもらうためには、文学がいちばん説得性を持っている」⁷と述べた。それについて島木健作は、「国策の線に沿って積極的に活動したい」と発言したのに、有馬農相は「農民文学は既成の国策に沿うことではなく、むしろ今後真に農村を救う国策をたてるその原動力となって欲しい」と答え、さらに「国策だから仕方なしにやるというのではなく芸術的良心の許す限り、喜んであらん限りの努力をされたい⁸」と述べている。すなわち、当時島木健作は国策だから積極的に活動したいという消極的な意思がうかがわれる。また、田村泰次郎は、当時の島木について「島木はつねに日本農民の大陸進出に関しては、彼らの擁護者であり、その立案者と実行者に対しては監視者であった⁹と」評価を与えた。島木健作は満洲行きの目的を『満洲紀行』の「ある読書」には、「開拓地を見学するといふことは私の満洲旅行の主要な目的であった¹⁰」と記している。彼は和田傳につづいて、昭 14 年 3 月に朝鮮経由で満洲へ渡った。帰国後そのとき聞いたことや見たことを『満洲紀行』にまとめる。『満洲紀行』は満洲農業移民に焦点をあてて描かれているので、まず、満洲農業移民の社会的背景と農業移民政策について述べよう。

3. 満洲農業移民の社会背景と農業移民政策

満洲移民の時期は、「満州事変」の翌年である 1932 年 10 月から日本が敗戦する 1945 年 8 月までで、延べ 102,239 戸、220,968 人が送出された¹¹。また、こうした日本人移民の大多数は、日本国内の小作農や農村雑業者、ないしはその子弟であった。また、満州移民

⁷ 注 6 に同じ、p. 274

⁸ 注 6 に同じ、p. 274。

⁹ 注 6 に同じ、p. 274。

¹⁰ 島木健作「ある読書」『満洲紀行』リバイバル〈外地〉文学選集（第二回配本）第十六巻、（2000. 10）大空社 p. 273

¹¹ 浅田喬二（1996.5、増補版第 3 刷；1968.4、第一版第一刷）「補論二 満州農業移民政策」龍溪書舎、p.292

事業において、その主導権を握っていたのは、日本陸軍の関東軍であった。

また、浅田喬二によると、「満州移民は国策移民として、天皇制国家の侵略目的にそって送出されたものである。したがって、日本人移民にかせられた使命は、この国家目的の変化にともなって微妙に変化した。しかし、満州移民送出の全期間にわたって一貫していることは、この農業移民が、日本人を満州で農業経営者として定着させることをねらった「経済移民」ではなく、軍事的・政治的な目的をもって行われた移民であった¹²」といい、さらに、その目的を「①日本帝国主義の傀儡国家である満州国の治安維持・確立に協力すること②対ソ防備・作戦上の軍事的補助者として関東軍に協力すること③重要な交通路を防衛すること④日本農村の「過剰人口」・「土地飢餓」を解消するため⑤満州重工業地帯の防衛に協力すること⑥満州に日本民族を指導的中核にした「日本的秩序」をうちたてるため」¹³の六点とした。それによって、満州移民事業の展開は次の三つの時期に分けることが出来る。(一)試験移民期(1932—1936年)(二)本格的移民期(1937—1941年)(三)移民事業の崩壊期(1942—1945年)である。¹⁴前に述べたように、島木健作が北満開拓地を見学し、各地の農村を視察してきたのは1939年の春から夏にかけての期間であった。その時、試験農業移民は既に終わり、本格的に農業移民が始まって二年目のことであった。この時期の特徴はまず、1937年～1956年の20カ年間に100万戸・500万人の日本人移民を満州に送出すること。さらに、移民要員として、「日本内地」における農、漁、山村の状態、都市失業者の状態等を考慮の上、思想堅実、身体強健なるものより之を選定するものとす¹⁵」として

¹² 浅田喬二「満州農業移民と農業・土地問題」『近代日本と植民地 3—植民地化と産業化』岩波書店(2001.3; 初出 1993.2 第1刷り) p. 79

¹³ 注12に同じ、pp. 79—80

¹⁴ 注12に同じ、p. 80

¹⁵ 喜多一雄『満州開拓論』明文堂 p. 156 (1944年)

いたこと。最後に、移民用地として確保すべき土地面積を千万町歩（千万ヘクタール）とし、その取得地帯の中心として北満州地方を指示していたこと。それによって「満州農業移民百万戸移住計画案」は日本政府の国策である「満州農業移民百万戸送出計画¹⁶」として確定し、1937 年からは日本人農業移民が大量に送出されることになった。以下、『満洲紀行』に描かれている日本農業移民の実情や、日本人開拓民と満人農業者との人間関係を見てみよう。まず、北満の農業の実情について述べる。

4. 北満開拓地の農業の実情

まず、最初に、農業移民と青少年義勇軍との、その違いについて説明しておこう。農業移民は「満洲国」の国有鉄道、いわゆる満鉄の沿線で、特に満州東北地域のソ満国境へ通じる軍用鉄道の沿線に、それを防備するために配置されている。すなわち、農業移民は「人間トーチカ」として満州国境に投入された¹⁷のである。そして、その日本人農業移民の最大の責務は、生産した農産物の関東軍への軍需供出と「内地」供出であり、義務付けられていた。ただ、農民の生産実態が全く無視されたので、こうした点が日本人満州移民の不足した原因の一つである。さらに、太平洋戦争の影響により、国内農業者の大量兵員化と軍事工場労働者化のために、農業労働力がさらに急速に減少したのも、日本人満州移民不足の要因として挙げられる。一方、「満蒙開拓義勇軍」は 1937 年 11 月にその創設が閣

¹⁶ 満州農業移民事業担当官庁である拓務省は 1937 年 5 月 20 カ年 100 万戸送出計画の第一期一〇万戸送出計画（1937-1941 年）の実施大綱である「満州移民第一期計画実施要領」を作成した。満州大量移民事業は、1932 年からはじめられた農村経済更生運動と結合させられ、日本農村の唯一の土地飢餓対策として実行されたのである。この満州移民事業と農村経済更生運動との連結は、1938 年から本格的に実施された分村移民というかたちで具体化した。分村移民というかたちでの農業移民は、1940 年度以降、日本人満州農業移民の主要な形態となった。（脚注 11 と同じ pp. 84-85）

¹⁷ 浅田喬二（1996.5）「補論一 満州移民史の課題について」『日本帝国主義と旧植民地地主制』龍溪書舎、p.271

議決定され、1938 年から満州送出が開始された。そして、この義勇軍は 1941 年から 1945 年までの間に 57,100 戸が入植した。また「義勇軍開拓団」が、1943 年度以降、そのすべてがソ満国境の最前線地帯に「人間トーチカ」として投入されたが、「開拓団」とはただ名義だけで、実際には、軍事的に関東軍の後備兵力として利用されたのである¹⁸。

次に、『満洲紀行』の概要について見てみよう。語り手の「私」は、北満の主な鉄道の沿線にある 15 か所の開拓地を訪ね、ハルピン、孫呉、鐵驪、勃利、嫩江の各所にある青少年義勇訓練所を見て回った結果、開拓農民の生活にかかわるいくつかの問題点を提出する。そして、語り手の「私」は、第一段階という開拓地の問題¹⁹をまず終えたと言ったが、やはり、次の問題はまだ残るとも述べ、①個人経営による人力不足のために満人農民の労働力を使わざるを得ないこと、②満人を雇うことによる賃金の増加と開拓農民の経済の悪化、③北海道式の農法を導入するには機械を使う技術者が不足している上に満洲での耕作に相応しくないこと、④「五族協和」における日本人と満人との力関係一などの問題点を挙げている。では、以下に、こうした問題点について見てみよう。

た

4.1 個人経営の人力不足による問題

開拓農業移民はなぜ人手不足の問題が起こったか。まず、最初は集団経営方式をやったが、次第に個人経営に移るし、一戸当たり平均の耕作面積は、年々すこしずつ増大していくものであり、大体四、

¹⁸注 17 に同じ。

¹⁹第一段階の開拓民の問題は「まず、寒さであり、治安であり、土地は果たしていいかであり、作物はどうか、ことに米はどうかであり、娯乐的なものからとざされた僻遠の地に堪えられるかどうかであり、学校や医療はどうか、子供は果たして育つか、」等であつた。島木健作「北満開拓地の課題」『満洲紀行』p.10 リバイバル〈外地〉文学選集（第二回配本）第十六巻、大空社（2000.10）

五町²⁰歩から七、八町歩というところである。「自家勞力を本位として且つ經濟的に成立する自作農を設立すること」(p. 17) は、満洲農業開拓の根本方針の第一である。しかし、実際に開拓民は自家勞力をもってどれだけの面積をこなし得る能力を持っているか、語り手はわからないと言っている。開拓民の話によると、「満農は一人二町八段²¹の能力あるものを一人前としているが、日本人は一人五段であらう」(p. 18) と言うのである。即ち、現実には日本農業開拓民は満洲での耕作能力は満洲人に及ばないことである。というのは、開拓民の家族は若い夫婦からなるものが大多数を占めているし、妻の勞働力は相当なものとして考えうるというのに、入植早々のものはともかく、少し年を経たところ却ってこれを計算に入れる事ができないから。それは彼女らは大抵一人二人の乳呑児を抱えているから、働कि手が奪われることになったのである。家族の数は多いものもあるが、それは老人、幼児のことであり、一人前の手が加わっているわけではないと語り手は指摘している。しかし、ある満洲を旅行してきた著者が「移民團の農業經營は、殆ど家族勞力をもって行つてゐる」(p. 23) とか「現在の移民地に行はれてゐる程度であれば、四一五人の家族勞力があれば、勞力不足を告げることはない」(p. 23) と書いたものがある。その著者の觀察したことに、語り手は「この著者は果たして自分の眼で見て、ものを言つてゐるのであらうか」(p. 23) と疑問を持っている一方、日本内地の自作農の例を取り上げて説明すれば、家族員 7.7 家族勞働力 3.5 の割合であるが、開拓民一家に、4.15 人の家族勞力を持つものが、当日の開拓団のなかにどれだけであろうかと反問する。語り手が反問できるのは、実地に行つて開拓民の家庭を見もして泊まつてもあるからである。よつて、「移民團の農業經營は、殆ど家族勞力をもって行つてゐる」(p. 24)

²⁰ 町は土地面積の単位、1 町は 10 段、3000 歩とされ、約 99.17 アール。(新村出編『広辞苑』第二版補訂版による) p. 1447 岩波書店 (1982. 10)

²¹ 段は土地面積の単位、1 段(反)は 300 歩(坪)で、約 991.7 平方メートル。(新村出編『広辞苑』第二版補訂版による) p. 1406 岩波書店 (1982. 10)

というのは、全く事実に違っていると語っている。もし、その著者の話が真実だったら、開拓民が人手不足に悩むという問題はなかろうと語り手は語っている。また、「開拓団で、農耕に満人の力を使つてみないところは一つもなかった」(p. 25) に対して、それは開拓民が建設作業に力を尽くしている段階で、農耕に手を回らないので、もとの地主の満人を苦力として使うはずで、「彼等の力を借りなくては、今日程度の面積を耕作することも、ほとんど不可能である」(p. 28) と説明する。語り手はこれまで満洲農業を視察した人間たちが殆ど触れなかったことを指摘している。それは日本人開拓民の農業が実は、満人農民の労働力を使って行われているという事実である。また、開拓民の農法は宣伝のように北海道の洋式農法ではなく、在来満洲式農法をとっている実情がある。というのは、満洲の耕作法が高畝作り法を遵守する以上、北海道で使うプラウ²²、ハロウ²³、カルチベーター²⁴といった洋式農具は役に立たないという。「雨季には満洲の土は特有の状態を呈する。土のあらゆる隙間が水でみたされ、植物の根は呼吸ができなくなる。しかし高畝になってみると、水は溝に流れこむ。一種の排水がここに行はれる」(p. 87)。すなわち、北海道農業が、播種、除草、刈取とその作業量が均一化しているのに対し、満洲農業が除草の能力によって限定されていて、しかもそれは機械化が困難で、人手を頼りとせざるをえないことを理解している。よって、その農法も結果的には在来の満人式農法に依存しているのである。しかし、在来の満人式農法に依存するなら、労賃の問題が生じる。

²² プラウ(英:plough, または plow)とは、種まきや苗の植え付けに備えて最初に土壌を耕起する農具であり、トラクターの作業機である。
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%97%E3%83%A9%E3%82%A6>、2014. 09. 16 閲覧

²³ 農機具の一つ。犁で耕した表面の土塊を粉碎し、耕地表面を平らにし、播種・移植に適当な地作りをするもの。畜力用とトラクター用がえる。砕土機。(『広辞苑』第二版補訂版による) p. 1831 岩波書店(1982. 10)

²⁴ 畑の中耕・除草・土寄せなどの作業に使う畜力・動力用農機具。(新村出編『広辞苑』第二版補訂版による) p. 474 岩波書店(1982. 10)

満洲人を雇う場合、労賃は開拓民にとって大きな負担になる。語り手の「私」の視察によると、山形県出身の人々からなる自警村は、昭和十二年満洲に入植した。「一戸当たりの借金、土地、家屋、馬等で、大體四千圓見當と思はれる」(p. 208) が、「その半額は、鐵道總局が引き受けてくれるので、あとの半額を五ヶ年据おき、二十五ヶ年年賦で返す」(p. 208) のである。この村の問題は個人経営には労働力不足なので、他人の労働力に依存する量が多いからである。「一町歩平均三十五一四十人の人夫を要し、十五町歩の人夫賃はほとんど千圓、そのうち自家労力によるものとして二百圓を差し引くとして他は全部人に拂う」(p. 209) という。一方、北満の農業が「雇農の労働力にたよることが、営農資金中現金支出部面の八十パーセントは労賃である」(p. 238)、日本人の開拓民は満人の在来の方法にたよっていたら、いつまでたっても満農の力に依存しなければならないという事実がある。実際、浅田喬二の研究によると、「農業移民の四大営農方針のひとつである自給自足主義とは、日本人農業経営と農家生活のなかから貨幣経済性をできるかぎり排除する、ということである。しかし、農業経営・農家生活とともに、その現金支出化が進行し、自給自足主義とかけはなれることが著しかった。つまり、移民農家は、その経営・生活をとわず、貨幣経済が支配的であった。こうして、日本人農業移民の自給自足主義の實現というのは、たんなるスローガンとしてしか存在しなかった。ところで、農業経営費の現金支出が巨額となった最大の要因は、農業移民が在来農法に依存したために大量の雇傭労働者をしようせざるをえなくなったことである²⁵。」という。語り手を通して島木健作がみた北満の農業移民の実情は浅田喬二の研究と一致するところがある。次に、なぜ農業移民は満州の耕作方式に頼らなければならないかということについて探ってみたいと思う。

²⁵ 浅田喬二「満州農業移民と農業・土地問題」『近代日本と植民地 3—植民地化と産業化』岩波書店（2001.3；初出 1993.2 第1刷り）p. 96

4.2 満洲の耕作方式

満農が持つ技術を習得し、模倣し満人のレベルに達するまでは年月がかかる。気候や風土が類似していた北海道の農法を北満に移植させるという動きは、1939 年頃から徐々に具体化し始めていた。1940 年段階に入ると、北海道農法を用いた開拓農場実験が北満各地に設立された。北海道から派遣された技術優秀で満洲農業への理解が高い農家の実験結果は、自家労力をもって一戸当たり平均六町二反を工作し、1300 余円の粗収入をあげ、食糧、飼料を自給しえたことであった²⁶。しかし、その成果は北海道農法に習熟した農家であればこそ可能であったが、北海道入植の新人でこれに慣れるには約二年の歳月を必要としたといわれるが、牛馬さえ十分にこなせない開拓民には、より時間が必要であった。また、1940 年には開拓農場実験場は全満で 18 か所 191 戸にすぎず、先進の機械農具なども不足していた。語り手は、開拓村の移民に北海道の農法をなぜ使用しないかと聞いたことがある。開拓民は「北海道のやり方は、そのままでは満洲の地に適用できぬ」(p. 78) と返事をした。というのは、北海道農業においては、播種の能力、除草の能力、刈取の能力というものがほぼ一致しているとみることができる。播種は相当にやったが、除草能力がないのでだめにしてしまうということがない。しかし北満の農業の実際を見ると、この点はまるで正反対である。ここでは、労働力はけっして平均に使われていない。除草や中耕のこともふだんからこまめにやって、「草に追われず、草を追う」(p. 84) ようにすることができない。それは、能率的な中耕や除草の法がないからである。除草の農具はまず「鋤頭」である。高畝式除草機というのがあっても実際には役に立たない。中耕には鏝犁がつかわれるが、馬は三頭を要し、開拓民には一人でこれを扱って行くのは難しい。しかも一日の工程一晌程度で、これは満農であっても二晌以上ということはないのである。夏期には雑草は一時にのび広がり、

²⁶ 小林英夫「『満洲国』は何を目指したのか。」『〈満洲〉の歴史』初出『満洲開拓年鑑（昭和十六年度版）』による。（2008. 11）講談社 pp206-207、

今や一刻の猶予もなく、人手を大勢雇って草刈りをしなければならないのである。北海道の農具は高畝作りに適応させることはできない。有力な指導者は、「高畝作りというのは、支那のやり方の傳統にすぎない。これはうちこわしていい、開拓民にプランの使い方を教えることが急務である」(p. 86) とはっきり「私」に言った。すなわち、有力な指導者は現実を無視して、満洲の在来農法が遅れているので、新しい北海道の農法を導入しなければならないと主張している。

以上、語り手の「私」は北海道式の農法が満洲では何故適用できないかを具体的に説明している。その大きな違いは、満洲の耕作方法が北海道の耕作方法と基本的に違うからである。というわけで、開拓民は農業をするとき、満人の力を借りなければならない。しかし、一方は支配者の日本の農民であり、一方は被支配者の満人の農民である。二者の力関係はどうなるか次に探求しよう。

4.3 日本開拓民と満人との力関係

満洲は、日本開拓民が入植する前、既に満人の耕作地であった。日本開拓民が入って来たために、彼らは早晚この土地を去らねばならぬ運命にあるものである。もともと地主の身分を持っている満人は、いま開拓民に雇われている「苦力」になる運命であった。「民族協和」というスローガンを挙げている国策のもとで、開拓民と満人との力関係は明らかに示されている。以下の引用文を見てみよう。

民族協和を真に重大と考へるものの心は満足するであらうか。日本開拓民は今日、満人農業労働者を使役することによって、その存在の基礎を得てゐる。眼あるものは誰でもが見てゐる事實である。両者の関係は主人と雇人との関係である。この両者の間の親睦が、感傷をともなつて傳へられる。雇傭されるもののなかには、開拓民入植前までは、自立した農民であり、主人であつたものもある。彼等の新しい替地はどうかつてゐるので

あらう。彼等の土地を賣った金はいつまで手許にあるのであらう。日本開拓民の今日の能力の小ささが、彼等を必要とし、彼等をここに引き止め、彼等も亦當座はこの關係に頼つた方をよしとしてゐるのだが、この當座はいつたいいつまで續くであらうか。(pp. 72－73)

上記の引用文には、語り手のいくつかの指摘が読み取れる。まず日本人の開拓移民の多くは、満洲人の農地を取り上げた土地に入植した。もともと地主であった満人は、日本人の入植のため、小作という身分に転落してしまった。川村湊は「農業移民が現地で地主—小作關係を再生産させるということは、日本の農業制度的矛盾の解決を目指した満州移民にとって、明らかな政策的な矛盾であり、植民地支配を否定しようとした日本にとっても、言い逃れようのない植民地収奪といわざるをえない²⁷」という。即ち、日本の農業移民は日本国内で小作人と地主との關係で苦しめられたので、その苦境を脱出するため、満洲に移民することによって、小作と地主との關係を解決しようとする。しかし、農業移民は満洲に来てから身分を、地主に一変して小作と地主との關係をつくるようになった。引用文には、開拓民の入植した土地が、満人農民から何らかの手段で購入あるいは交換された土地であることも分かった。そこで自作農が小作農に転落し、「民族協和」のスローガンによる日本開拓民の入植が、先住の満人、朝鮮人農民にとって侵略的なものであったことを語り手は指摘しているのである。「この當座はいつたいいつまで續くであらうか」(p. 73) と将来日本開拓民の能力が増大するに従って、満人との持ちつ持たれつの關係は壊れる可能性が強い。そのとき、満人はどうするか。「莫談國事。謹慎公文」(p. 73) と満人の人生と社会への態度はここに現れると語り手は認識している。

²⁷ 川村湊『異郷の昭和文学—「満州」と近代日本—』岩波書店(1998.7) p. 55

和田傳の小説『大日向村²⁸』には、立派な農地を準備されていたことを母村に報告する手紙が引かれている。「ここではすでに立派な耕地になっているのです。しかも水田の如きは延長六里及び四里半にわたる二本の用水路が開かれております、既墾地とはいいいながら古いものでもまだわずかに三、四年しか経っていませんので、今後尠なくとも十年は無肥料で反当たり一石乃至一石五斗くらいの収穫はあると見られています」（『大日向村』p.162）まだ開墾に行っていないところで、誰が立派な農地を準備してくれたか。開拓移民がそれについて疑問を持たなかったとは、やはり不思議としか言えない。即ち、島木健作の『満洲紀行』にも和田傳の『大日向村』にも開拓移民がとった北満の耕地は、武力を背景にした日本政府の力でもとの満人の地主の土地を奪ったものであることは否めないであろう。また、満洲には農業移民のほかに、満鉄社員やビジネスマンや出稼ぎの日本人や協和会の人々がいる。そして、優劣が混じっている彼らは、支配側の国民として満洲を往来して、その中で横柄な行為をする者もいるだろう。では、こうした支配者側にある日本人について、引き続き述べてみよう。

5. 満洲で生活している日本人

語り手が見た満州での日本人は、農業移民のほか、義勇軍の訓練生や都会に住んでいる日本人の知識人などである。こうしたさまざまな在満日本人のうち、まず、農民の生活を述べる。

ある著名人の作った農民の収支計算表によれば、農民のひと月の食費は二円であり、それを除いてから百五十円の剰余がある。また、ある官吏の記述には開拓民一人の食糧の自給は、四段五畝あれば足りるそうである。それについて、語り手はそれが満人の生活よりはかるに劣ると示した。さらに単なる表だけのものは実際の開拓民の生活を明らかに示していないという。農民自身は満洲の生活をいか

²⁸ 和田傳『大日向村』（『昭和戦争文学全集 1』（1964. 11）集英社より刊行される。初出昭和 14（1939）年朝日新聞社より刊行される。）

に見ているか。日本にいたとき、農民は「人間らしき生活」を望み、その希望をもって満洲に渡ったが、一部分の団長から「開拓民は百姓をすることがたのしみだから、ほかになんにもいらない」(p. 60)とか「娯楽なんぞない方がいい、却つて夫婦仲が円満である」

(pp. 59-60)という説に激しい反発があった。「農民は何故に人よりも低い生活にゐねばならぬときめられてゐるのであるか。人には許される人間的な生活的な欲求がひとり農民には許されぬのであるか」(p. 60) 開拓民の農民という身分が決められる以上、人間らしさに生きてほしいという望みを求めるのはいけないのかと農民の耐えられない憤りが感じられる。しかし、満州農業移民は決して「経済移民」ではなく、むしろ政治的、軍事的な目的を持っているはずである。その前提には農業移民の希望が政府の政策と食い違うところが出るはずである。

次に、義勇軍の訓練生の生活を見てみよう。義勇軍の創設は 1937 年 11 月に閣議決定し、翌年の 1938 年から満州送出が開始された。この義勇軍の創設は、1937 年から実施された大規模移民事業である二〇カ年百万戸送出計画を、成功・実現させるためにおこなわれたものである²⁹。語り手が見た勃利という所は、中国とロシアの国境に近いところである。訓練生の生活は、「農耕四割、軍教四割、學科二割」(p. 140)の割合である。「学習資料」は、満洲拓植公社の係りによって編まれたものである。内容は、日本の歴史（天孫降臨、国体と祭祀、明治天皇）、満洲国に関するもの（建国、地勢、気候と生活、産業、行政）、日満一体、日本の東洋における地位などである。若い義勇軍の少年らには、様々な苦痛がある。例えば、①すべて公費でまかなわれているので、お小遣いはいらないと思うのは間違いである。②医療システムの不完備で健康状態が悪い。③読み物が不足しており、精神的に貧困である。④国策に合わせて満洲に送られてきたが、県か村からの連絡がない、まるで棄民のようだと正直に

²⁹ 浅田喬二「満州農業移民と農業・土地問題」『近代日本と植民地 3—植民地化と産業化』岩波書店 p. 89 (2001.3 第 3 刷り、初出 1993.2 第 1 刷り)

不満をこぼしている。義勇軍の訓練生はほとんど 16 歳から 19 歳の若者であり、日中全面戦争開始後、「満蒙開拓青少年義勇軍」は「国策」となり、1938 年 4 月、第一陣 5000 人が渡満したのをスタートに、敗戦までに約万人の少年が満洲地の訓練所に送り込まれた³⁰。この少年らは屯墾病（ノイローゼ）にかかり、周辺の中国人の部落を襲って暴行のかぎりを尽くし、女性を強姦する事件も生じる。しかし、そこまでは語り手は触れていなかった。この青少年義勇軍の生活を世話するために、満洲移住協会が、東北県と長野県、熊本県において寮母（年齢は 25 歳から 45 歳までの独身者）の志願者を募集し、300 人の応募者から 43 人にとって、三ヶ月の訓練を受けて満洲に渡ってきた。寮母は「大陸の母」と呼ばれ、「青年義勇軍の男ばかりの大世帯に温かい家庭的雰囲気を与えるのが役目で、炊事や洗濯の手伝いをしたり、綻を縫ってやったり、病気の看護もすれば、屯墾病の少年を慰めて再び起こった勇気を与えてやるなど全く文字通りのお母さん役なのです³¹」。という。しかし、寮母にとっては満洲の生活もはじめてであるから、義勇軍の少年の世話をすることはうまくいっていないし、思春期の青少年に囲まれてセクハラの問題も起こり、義勇隊を離れようとする寮母もいた。

最後に、都会に住んでいる日本人を見てみよう。まず、満鉄社員の夫婦を例にあげて説明する。夫は夜宴会とか付き合いとかで連日忙しいので、晩の食事を家で済ますということは少ない。社宅の妻は夫のいない夕食お膳に作る気もせず昼の残飯を茶付けで食べる。さらに時間をつぶすために満鉄社員の妻らは麻雀に没頭する。全体から言えば、満鉄の妻らの生活には精神的な、内容的な貧しさが覗かれる、その影響によって、妻たちの健康は悪化し、子どもの健康状態も不良である。また満洲花嫁として来た新妻は、夫の何ヶ月にもわたる出張で、気抜けになった人もいた。そのような厳しい生活に直面している日本人は、「満妻」を作ることになった。即ち、満洲

³⁰ 加納実紀代「満洲と女たち」『膨張する帝国の人流』岩波書店 P. 215 (1993. 4)

³¹ 注 30 と同じ、p. 215

に移住した日本女性は、「寮母」にしても「満洲花嫁」にしても、あるいは満人の「満妻」にしても、国策に合わせた大義名分のもとで利用されたり犠牲にされたりした事実は否めないであろう。

6. 語り手を通して島木健作の批判

川村湊は、「島木健作が、満洲の開拓農業の問題点を鋭く把握することができたのが、彼がプロレタリア運動の活動家として、日本の農業事情、農村事情についての知識をもっていたということもあるだろうが、要は彼が「生活」の細部についてこだわらざるをえないものを持っていたからだろう³²」と指摘している。つまり、島木健作はプロレタリア運動を経験した人間であり、さらに、農業事情や農村事情に詳しいことから、満洲農業移民の生活を掌握することができたと言っても差し支えないのである。そのため、『満洲紀行』には、島木健作は語り手を通していくつかの国策についての批判が見られる。では、その一部を下記に示す。

「勿論、移民團によりては、満人労働者を入れて経営してゐる團もあるが、原則として家族的経営であつて、建設の初期には他家労力を可成り多数入れて経営してゐた移民團も、だんだん自家労力を貴重とせる経営に歸りつつあるのである」(p. 28)

満洲農業移民における満人労働者を雇い入れての経営について、建設の初期にかなり多数の満人労働者を入れて経営していたが、次第に自家労力の経営に移りつつとある著者が語っている。それについて、島木健作はその言い方は無責任であり、満農を雇うことは「単に彼等の労働力を買うといふばかりではない、同時に、彼等の技術をとるといふことでもある」(p. 35)と北満の農業事情を明らかに示したのである。また、昭和13年8月の文書には「日本移民が入つて来て、農業をやることは、從來非常に後れた満洲人に非常に進んだ

³² 川村湊『異郷の昭和文学―「満州」と近代日本―』p. 56 岩波書店(1990)

農業技術や農業経営方法を教へることになるのであります」(p. 42)という。この言い方はまるで、日本の先進技術や経営方法を満洲に齎してから、満農がそのために大きな利益を得られるようである。それはただ日本側一方的な傲慢的な考えである。支配者がいくら先進的な技術を持っているからといって、後れた被支配者に頭を下げて学ぶのはありえないことであろうか。あるいは、支配者側の面子に関わるので、作り話をしなければならないのか。また、ある作家がこの国策に合わせて「黙せる師匠」で次のように書いてある。

「…(満人は) だから、改良といふことに一切眼を向けない。唯眼先の習慣や方法で何千年來自然の歩みに任せて移り變わって來た。そこへ新しく移民といふ日本の民族が新しい様式を持ち込んで來た。移民たちは最初は氣候風土に順應して満人の長所に習ったが、次第に一つ一つ改良の面を現しはじめた。(中略) これをみた満人たちは、次第に尊敬と信頼とを移民に持つやうになつた。」(p. 43)

島木健作が挙げた「黙せる師匠」の作者は、満人が伝統的な農耕方法を遅れているものだと見下ろし、日本の移民らが持ってきた新しい様式を進歩の農耕法と自慢する。最初に満人の長所を学んだが、次第に日本の新しい農耕の方法で改良した結果が出た。そのために、満人の尊敬と信頼を獲得するようになったと、日本人の面子のためか「農業の師匠」は島木が北満を視察したときと、全く違う事情を主張している。また、農業開拓民と多民族との関係についてもっと慎重的に考察しなければならないと提出する。「満人農民が日本開拓民に使われてゐる状態が一応平和であるといふので、民族の協和が行はれてゐる」(p. 279) とある著者の甘いことを取り上げて「日本人の多民族の中へ進出の新しい意義を信ずる人々が、この点の考察をないがしろにしてゐると」(p. 279) という事は不思議なほどであるとも指摘している。即ち、日本の開拓民と入植地の満人や朝鮮人

などの原住民との関係を一切に無視して、自己満足のように多民族も協和してくれると信じている。満州でみた日本人の生活の節にも触れているように、いままで満洲国の宣伝には国民の間に、大陸についての正しい認識が欠けているし、世間に流布している満洲開拓地に関する書物は、机の上の設計図や、のりと鋏の作業でしかない。島木は、実際の満洲事情が伝わっていないとも指摘している。

7. 終わりに

『満洲紀行』には北満の農業移民は日本国内の小作貧農の土地不足の状況や「農家過剰」の問題を解決するため、政府の政策に合わせて、北満に移民してきた。彼らの面した問題はまず、日本国内より広い土地と人手不足である。農業移民は自家労働力が足りないし、日本国内で零細経営の経験しかない貧農であるから、二十町歩の耕地を自力で耕すことは無理である。そのため、経済的に耕地を利用するには、農業移民の圧倒的多数は、自己の所有耕地の半分内外を中国人農民（一部朝鮮人農民）に貸付て小作料をとる地主となった³³。それはやむを得ずことであると島木健作は農民の状況理解しながら、これから、日本人の農業移民が原住民の満人との関係はいつか変わったらと心配している。

また、「五族協和」とうスローガンのもとで、開拓民はいかに多民族とうまく付き合うかという書物はあまりないし、日本の支配者側の面子を保つために、農法は日本の方が進歩で在来満人の農耕法は後れたと言いながら、開拓民は依然満農の力に依存することは否認できない状態である。島木健作は語り手を通して見た農業移民には、共通点がいくつかある。まず、人間らしい生活を求めて、満洲に渡ってきた。また、北満の農耕方式や経営農法が慣れていないので、満農の力に依頼しない人はほとんどいない。農業移民は満農

³³ 浅田喬二「満洲農業移民と農業・土地問題」『近代日本と植民地 3—植民地化と産業化』岩波書店 pp. 94—95（2001. 3 第 3 刷り、1993. 2 第 1 刷り）

の力に依頼し続ければ「自家労力を本位として耕作し且つ経済的に成立する自作農を設立する」という満洲農業開拓の根本方針に達する日が期待されないであろう。また、農業移民は満人を雇うお金は余計に増えていくので、経済的な負担になる。一方、農業移民が日本国内での「小作」という身分から地主に変わったのは、もともと満農や朝鮮人の土地を奪った結果であり、「五族協和」というスローガンに明らかに逆らっている。以上のように、満州の農業移民は人間トーチカとして国策のもとで利用された上、経済的に日本内地での「小作」という身分から満州で「地主」に変わった結果から見れば、まるで日本内地の地主と小作の関係を再制作するようになった。ただし、今度小作は土地を奪われた満農や朝農になった。それらの農業移民は政府の武力に依存して満州に移民したが、終戦のとき、棄民のように再び政府に捨てられた。残留孤児ができたのはその証拠の一つだと言えよう。

テキスト

島木健作『満洲紀行』リバイバル〈外地〉文学選集（第二回配本）
第十六巻 大空社（2000.11）

参考文献

- 加納実紀代「満洲と女たち」『膨張する帝国の人流』岩波書店（1993.4）
川村湊『異郷の昭和文学—「満州」と近代日本—』岩波新書（1998.7
初出 1990.10）
尾崎秀樹「満洲国」における文学の種々相『近代文学の傷痕』岩波
書店（1991.6）
島木健作「ある読書」『満洲紀行』リバイバル〈外地〉文学選集（第
二回配本）第十六巻、大空社（2000.10）
浅田喬二「満州農業移民と農業・土地問題」『近代日本と植民地 3—
植民地化と産業化』岩波講座（2001.3 第3刷り、1993.2 第1刷

り)

小林英夫『〈満洲〉の歴史』講談社現代新書（2008. 11）

新村出編『広辞苑』（第二版補訂版による）岩波書店（1982. 10）